友人が事故にあった。

大学の講義を終えて付き合っている彼女の家に向かう途中、不運にも、雪の重みで剥がれ落ちた民家の屋根瓦が彼の後頭部を直撃したらしい。

幸か不幸か、いくら待っても現れない恋人を探しに出た彼女が自宅付近の公道に倒れている彼を発見し、すぐさま彼は救急で病院に運ばれたわけだが、医師の想像以上に傷は深く、危険な状態なのだという。

薄暗い病院の廊下の壁に背を預け、アルフレッドは腕の時計に目を落とした。

手術室へと緊急搬送された彼が面会謝絶となってから、既に一時間が経過している。

薄暗い病院の待ち合いで彼の安否を気遣う家族や友人達にとって、それは苦行のように恐ろしく長い時間だった。

共通のゼミ仲間からの電話で呼び出されたアルフレッドもまた苦行者のその一人だ。

「私が悪いんだわ。こんな雪の日に会いたいなんて言ったから」

「君は悪くないよ。アイツも運が悪かったんだ。大丈夫、すぐに元気になるさ。俺が保証する」

「でも……」

「大丈夫。俺がついてるから……」

ふと、耳に入ってきたそんな会話に、アルフレッドはなんとなく視線を向けた。

待合の長椅子に座り泣いているのは、彼の両親と例の彼女だ。そして、隣から彼女の肩を抱き慰めている長身の青年。

あの青年にはアルフレッドも見覚えがある。確か彼の幼なじみだったはずだ。

慰め合う二人の様子は随分親しげだが、何故だかどうにも釈然としない。ただの顔見知りにしては、二人の距離が近すぎる気がして……――。

「アルフレッド」

名前を呼ばれて、思考の渦に沈んでいたアルフレッドの意識は、急速に浮上した。

顔を上げれば、いつの間にかゼミ仲間の一人が心配そうな表情で目の前に立っている。

「おまえ、だいじょぶか？ なんか、顔色悪いぞ」